

シュメールの宇宙から飛来した神々③

THE LOST REALMS



ゼカリア・シツチン  
竹内慧 [訳]

浅川嘉富 [解説]

# マヤ、アステカ、 インカ黄金の 惑星間搬送



『マヤ・アステカ・インカ  
神々の起源と宇宙人』(5次元文庫)  
待望の完全新装版  
根源の謎解きへ! 黄金と巨石と  
精緻なる天文学がなぜ必要だったのか

## 「地球年代記（アースクロニクル）」の基礎知識

ゼカリア・シツチンのシュメール古文獻の解析結果には、定評がある。それは「地球年代記（アースクロニクル）」として発表され、世界中で激論を巻き起こしている真つ最中である。

この巻頭のコーナーでは、いわゆる「シツチン説」をまだ知らない読者のために基礎知識の概略を示す。既知の方は読み飛ばしてもらってかまわない。

シュメール文明の専門家であるシツチンは、世界中の隅々まで神々として君臨したアヌンナキとシュメール古文献で「宇宙からの飛来者」が、謎多きマヤ・アステカ・インカ文明の担い手でもあるに違いないとの確信から、本書を著したのだ。

シュメール人たちは無数の粘土板に、アヌンナキたちは大洪水のずっと前に地球に来ていたという記録を残している。『地球人類を誕生させた遺伝子超実験（12番目の惑星）』でシツチンは、その時期は大洪水の43万2000年前だったと結論づけた。この年数は、惑星ニビルの軌道での公転の120周に相当する。アヌンナキにとっての1年は、ニビルの公転の1周になるわけで、地球の3600年に相当する。彼らは、いつも必ず、ニビルが木星と火星の間を通過して太陽と地球にいちばん近づいた時に、地球とニビルの間を行き来していたのだ。

シュメールの古文書によれば、紀元前4000年紀の初期に、ニビルの統治者であるアヌとその配偶者のアンツが地球を訪問した。地球年にしてほぼ44万年前、ニビルの年になおすと僅か122年前に、まず第一陣として彼の長男エンキが金きんを採るために50名のアヌンナキの神々を第7惑星・地球に連れてきていた。この地球に存在する黄金は、清めのため神に捧げられることになったのだ。惑星ニビルでは、自然的利用と技術的利用の結果、大気が希薄になり、使えないものにならなくなっていた。大気は生命が呼吸をするために必要だっただけではなく、惑星の内部で発生する熱が消散するのを防いで、その惑星を温室のように包み込む役目も果たしていた。金の粉末を惑星ニビルの空高く浮遊させておくことだけが、ニビルが凍った生命のない天体になるのを防ぐ唯一の方法だとその惑星の科学者たちは、考えた。

聡明な科学者だったエンキは、ペルシャ湾に着水して、その海岸に基地エリドウを建設した。彼の計画では、この湾の水から金を抽出することになっていた。しかし、その方法では十分な金は得られず、ニビルの危機は急を告げていた。アヌは、この計画を成功させると請け合ったエンキのやり方にしびれを切らして、自分の目で状況を確かめようと地球にやってきた。アヌは自分の正式な継承者エンリルを伴ってきた。エンリルは長男ではなかったが、その母アンツがアヌ自身の異母妹だったので、正当な継承権を持っていた。

このエンリルにはエンキほどの科学的知識はなかったが、管理者としては優れていた。エンリルは自然の不思議な謎といったものには何の興味も感じない質<sup>たち</sup>だったが、何かを処理することを引き受ければ、とことんまでやるというタイプだった。

このライバルの腹違いの兄弟たちの間での激しい論争が繰り広げられた。2人はくじを引いた。その結果、エンキがアフリカに行つて採掘の手順を整えることになった。エンリルはメソポタミアのエ・ディンにとどまって原鉱を精錬して、金を惑星ニビルに積み出すのに必要な設備を建設することになった。こうしてアヌは、アヌンナキの惑星へ帰つていった。これが最初の訪問だった。それからしばらくして、別の危機が到来して、2回目の訪問が必要になった。最初に地球に降り立つてから、ニビルの年月で40年がたった頃、エンキが南アフリカで監督していた金鉱で作業を命じられていたアヌンナキたちが反乱を起こした。採鉱を続けることを拒否し、この危機の緊張を和らげようとしてやってきたエンリルを人質にしてしまったのだ。

こうしたすべての出来事は記録に残されていた。

神々の会議が召集された。エンリルは、アヌが地球にきて、会議を統括し、エンキに裁きを下すのがよいと主張した。こうして集まったリーダーたちの前で、エンリルは一連の出来事を説明し、エンキがこの反乱を率いたとして彼を非難した。しかし、当の反乱者たちが切々と実情を訴えると、アヌは彼らに同情し始めた。彼らは本来、宇宙飛行士であって鉱夫ではなかったのだ。彼らの労苦はもう耐えられないところまでできていた。しかし、こうして採掘される金なしで、惑星ニビルに宿る生命はどのようにして生き続けられるだろうか？

エンキはひとつの解決策を持っていた。自分たちは「原始的労働者」をつくるうとしているのだ、と彼は言った。エンキはもうすでに主任医師ニンティ／ニンフルサグの助けをかりて実験を行ってきたと述べた。

こういう訳で、遺伝子操作と実験室のフラスコの中で行なわれた猿人の女性の卵の受精から、ルル・アメルという「合成労働者」がつけられた。この人造人間には、生殖能力がなかった。しかし、エンキとニンフルサグは、試行錯誤によつて改良を重ね、完全なモデルをつくりあげた。2人は彼をアダム、つまり「地球の男」、人間と名づけた。この受精能力のある召使いたちによつて、金はたくさんつくられ、7つの居住地は都市に発展し、地上600人と軌道上のステーションの300人のアヌンナキたちは、常にゆとりある生活を楽しめるようになった。そのうちのある者たちは、エンリルの反対を押して人間の娘たちを妻として娶<sup>めと</sup>り、子供まで産ませたのだ。アヌンナキにとって、金を採るところは今や苦しみの涙を流す必要のない仕事になった。しかし、エンリルにとつては、この状態はすべて誤ちを犯しているように映り始めた。

すべてが大洪水によって突然の終わりを告げた。長い間、科学観測によって南極大陸の上につくられていた氷冠が不安定になっていると警告されていた。

次に惑星ニビルが火星と木星の間を通過して地球の近くを通りすぎる時、その引力がこの膨大な氷の塊を大陸から滑り落とさせる原因となり、世界規模の洪水を起こさせ、大洋と地表の温度が突然変化し、未曾有の大嵐が吹き荒れるだろうという警告だった。アヌと相談して、エンリルは命令を発した。宇宙船を用意して地球を放棄する準備をしろ！ と。しかし、人類についてはどうするのだ、と人間たちの生みの親であるエンキとニンフルサグは尋ねた。人類は抹殺してしまえ、とエンリルは言った。エンキは自分の忠実な従者ジウスドラに「テイバツ」(潜水できる船)というものをつくるように指示した。

アヌンナキの神々からシユメール人たちに口述された「天地創造と大洪水」の古文書は、一般の聖書の要約編集された版よりもさらに詳細にわたり、明確にその物語が述べられている。この突然の大変動が起きた頃、地球上にいたのは、半神半人だけではなかった。主な神々の中のある者たち、つまり12の聖なる輪のメンバーたちは、彼ら自身ある意味では人間だった。ナンナル／シン、イシユクル／アダドといったエンリルの若い息子たちは地球で生まれた。エンキと一緒に秘密の「ノアの方舟工作はこぶね」をしたと思われるニンフルサグは、他の者たちと共同で、アヌンナキたちはこれを最後に永久に地球を去るのではなく、しばらくの間地球をまわる軌道上に残って何が起きるか様子を見てはどうかと提案した。そして本当に巨大な洪水がやってきて、去り、雨がやんだ後で、地球の峰々が姿を現し雲間に輝く太陽の光線が大空にきれいな虹を描いたのだ。

エンリルは、人類が生きていたことを知って、怒りに打ち震えた。しかし、彼の怒りは次第に収まっていった。彼には、これでアヌンナキたちも地球上にまだとどまることができるとわかったのだ。しかし、もし彼らが自分たちのセクターを再建し、金の生産を再開するとしても、それには人類がその数を増やし繁栄することが必要で、この意味で人類はもはや奴隷ではなくパートナーだった。

大洪水以前の時代では、アヌンナキたちと彼らの必要品を運び込んだり運び出したり、そして金を積み出すための宇宙空港（宇宙船基地）は、メソポタミアのシッパルにあった。しかし、ユーフラテス川とチグリス川の間にあったその肥沃な土地すべてが、今では数億トンもの土泥で覆われていた。依然として着陸する宇宙船団の投錨の目印として、2つの峰のアラト山を利用していたアヌンナキたちは、ナイル川の堤の上に、実物の30分の1の対になった2つの人工の山々をつくった。それがギザの2つの偉大なるピラミッドで、シナイ半島の大洪水後の宇宙空港の航路標識としての機能を果たすものだった。この新しい空港は、アフリカの金の原産地に対して、かつてのメソポタミアのものよりもっと近くにあった。

人類が生きながらえ、増加し、アヌンナキの助けになれるように、人類に3つの地域での文明が与えられた。貴重な農作物の種がニビルから運び込まれ、野生の穀物が栽培され、動物が飼育されるようになり、そして粘土と金属についての技術が教え込まれた。特に最後のものがいちばん大切だった。なぜならば、その技術に金の供給を再開しようとするアヌンナキ自身の成否がかかってきたからである。今では古い鉱山は、泥と水で詰まっていたのだ。

大洪水のあと、惑星ニビルはもう一度地球のそばに近づいて、そこから重要な資材が運び込まれていたが、それに対して価値のあるものはほとんど送り返されなかった。昔の金の産地では、新しい鉱脈を探し当て、山腹にトンネルをあけ、地中に立坑を掘り、岩にはっぱをかけて爆破しなければならなかった。

アヌンナキが探し当て光線銃で爆破したものを、取り出すことができる道具、それも硬い道具を人類に与える必要があった。幸いなことに、激しい洪水もまた、ある点では良いことをしてくれていた。つまり、その水流が鉱脈を露出させ、それらを洗い流し、川床を泥と砂金の砂礫層が混ざった塊金でいっぱいにしていったのだ。この金を手で集めることができる新しい産地を開拓できたのだ。

しかし、その作業は簡単だったが、その場所にたどり着き、運び出すのが大変だった。その理由は、この種の塊金がいっぱいある場所は、地球の反対側にあったからである。

そこでは大きな大洋に面する山脈に沿って、秘密にされていた黄金の宝があらわになっていたのだ。もしアヌンナキたちがそこに行って、その金を運び出す方法を見つけることができたなら、そこそ金を得る絶好の場所だった。

まえがき

——マヤ・アステカ・インカに残された異星の超知的生物「アヌンナキ」の足跡

ヨーロッパの年代記では、新世界発見の物語は、エルドラドへの強い想いに彩いろどられている。それは黄金を求めての飽あくなき探査の軌跡なのだ。しかし、征服者たちは、はるか昔に大陸の探査がすでに何者かによって行なわれていたことを知るよしもなかった。自分たちが、二度目の「発見」をしているに過ぎないとは気づかなかったのだ！

彼らが、財宝を求めて、略奪のかぎりを尽くし、残忍きわまる破壊を繰り返した記録が残っている。その一方で、このヨーロッパ人たちが、自分たちの旧世界に非常によく似た新大陸の文明を目の当たりまにして、どんなに仰天したかを示す記録も残されている。

ヨーロッパと同じような、王制、裁判、都市、聖域、芸術や詩、空高くそびえる神殿、聖職者たちが存在していたのだ！ 十字架のシンボルも発見されたし、万物の創造主に対する信仰も記録されていたのだ！ 再び帰ってくると約束して、この地を去っていった、白い肌のひげを生やした神々の伝説も残っていたのだ！

当時の征服者たちが困惑した、マヤ、アステカ、インカやその先祖たちのミステリアスな謎は、5世紀後の現在も、われわれを悩ませ続けている。

このような偉大な文明が、新世界で、いつ、なぜ、どのように生まれたのか？ その実体がわかってくればくるほど、それが、古代中東の文明を手本としてつくられたように思われなくなるのは、単なる偶然なのか？

その答えは「天から地球にきた」アヌンナキの神々が存在していたことを、神話としてではなく、事実として受け入れることによって得られると、私は信じている。これから、この本がその証拠をお届けするだろう。

シユメールの宇宙から  
飛来した神々③

マヤ、アステカ、インカ黄金の惑星間搬送

THE LOST REALMS

目次

15 まえがき

—— マヤ・アステカ・インカに残された異星の超知的生物「アマンナキ」の足跡

第1章

マヤ・アステカ・インカ  
黄金の国エルドラドでは有史以前の金の鉱脈源から、  
何者かによって途徹もない量の金が蓄積されていた！

32 コロンブスの新大陸と金の鉱脈

37 貪欲なスペイン人は金を求めユカタン半島へ

38 強奪されたアステカ王国の金の財宝

43 騙し、虐殺で築いた黄金の山

48 次に篡奪さんだつの地として目をつけられたのは、ペルー

50 征服者たちは、さらなる黄金を求めた

53 マヤ族にとって金は「神々の排出物」

57 しぼり取ったとてつもない量の金のほとんどは、採鉱ではなく、蓄積されたものだった

## 第2章 「カインの失われた王国」は中南米にあるのか——ナワトル古代文書の謎

- 66 高度文明が結晶されたアステカの首都テノチティトラン
- 81 メソポタミア・エジプトとも共通する驚くべき彼らの創造神話
- 91 アステカ族は、「イスラエルの失われた10部族」の子孫!?
- 93 ナワトルの古写本とシュメール古文獻に共通して描かれた人類創成の過程
- 98 神がイスラエル人に語った約束の地カナンは、ナワトル族にもまた語られたのか!?
- 100 大洪水前の統治者から追放されたカインの物語も中央アメリカに存在していた!

### 第3章

蛇の神々の王国テイオティワカンを作ったのは、

謎の黒人オルメカ人か、あるいはエジプト・ピラミッドの隠された建設者なのか!?

- 110 テイオティワカン、太陽と月のピラミッドに秘められた神々の物語と暗黒の日
- 120 ギザのピラミッドとの隠されたつながり
- 123 傾斜角52度、43・5度に秘められた高度な幾何学
- 126 エジプトのピラミッドと同じ下へと向かう古代の階段を発見!
- 128 蛇の神々は、水との関係が深い

- 131 ハイテク装置か!?——太陽のピラミッドの下に雲母シリコンの部屋があった!!
- 134 ミニ・テリオティワカン「トラン」を治めた、神ケツアルコアトルの子孫とは?
- 138 トウーラ・グランデで発見された不可思議な遺物の数々……
- 140 アトランテスの巨大な石像は、何を意味するのか!?
- 143 それは、石を削るための「高エネルギーピストル」を表したもののなか!?
- 146 ピラミッドの中に埋められたもう一つの高度な仕掛けは、金の加工処理のものではないのか!
- 147 ケツアルコアトルは、エジプトの蛇の神々と同じもの——その神々の正体は何者か!?

#### 第4章

### ジャングルの中の空の見張人「マヤ族の天文学者」と 羽毛の生えた蛇神ケツアルコアトル

- 154 マヤ文明の叡智とテクノロジーには、想像を絶するものがあった!
- 157 チラム・バラムは、マヤの「エドガー・ケイシー」のような聖職者
- 160 ヘブライ語とマヤ語の驚愕の共通性——ホタンは、カナンから来ていた!?
- 163 マヤ族は、壮麗かつ聖なる都市を築き、それを捨て去っていた
- 164 パレンケのパカル・ボタンの墓は、古代宇宙飛行士のものなのか
- 170 それは、エジプトのファラオの地下埋葬場と同じものなのか
- 175 マヤ族の天文学の中心地コパンの残されていた驚異の暦と算法の知識

185 マヤの暦とエジプトの暦は同じもの、共にシュメール起源である！

190 マヤで最も神聖な周期52は、エジプトの神トトの「魔法の数字」と同じである！

194 トトの別名は、なんとケツアルコアトル！

## 第5章 マヤの謎をさらに深くするオルメカ人(アフリカ)とイスラエル、フェニキア人

198 トルテカ族はなぜ捨てられた都チチェン・イツアーを再び興して住みついたのでか

203 神々のまね？——チームリーダーの生首をかけた球技は、<sup>ゲーム</sup>なんのためか

206 マヤの数字や惑星のシンボルは、やはりメソポタミアと同じシンボルに貫かれている

211 インディオにはひげが生えない

——技術で作られた品々のひげの人物は、イスラエル、フェニキア起源か

217 明らかにアフリカの黒人

——最大の謎・オルメカ人は、どのように、なんのためにこの地へやって来たのか

221 石のない土地に石で作られた「巨大な頭」

224 多種多様なオルメカ人のテラコッタは、組織的な移住を示している

227 証拠はある——オルメカ人は金やその他の珍しい鉱物を掘り出すために、やって来たのか

236 運命を共にしたのか——アフリカのオルメカ人と東地中海のひげをたくわえた人たちとの関係

## 第6章

文明をもたらした黄金の「魔法の杖」をもった神は、  
シュメール文明をもたらした者と同じなのか

242 莫大な金製品を携えたチムー族のピラミッドは、まるでメソポタミアのジググラトのよう

245 チムーもまたさらに前の文化を引き継いでいた

247 黄金のパチャカマクの神殿の建設者「巨人たち」は誰なのか

249 その文明のすべては、魔法の杖と稲妻の矢をもった神リマックから始まっている

252 世界の始まりの創造主ピラコチャは、宇宙からの飛来者としてその名をとどめる

255 大洪水と復興の陰には、常に天から地球にやって来た創造主が関わりをもっている

## 第7章

すべての知識を与えた共通の神々が  
地球のすみずみに存在していたのではないか!?

282 インディオの生活とその文化は、聖書の物語、聖書の教え、聖書の習慣と瓜二つ!

——やはり彼らはイスラエルの失われた10部族なのか!?

284 聖書とアンデス両方に共通する記憶——大洪水のあと、10部族のはるか前、

オフィルに率いられてペルーに移民してきた一団がいたのか!?

288 人類をアンデスに導き、都の建設にのりだした「ピルア・マンコ」が、

ペルーの名称のもとになっている

292 マチュピチュ——それは古代インカ帝国の失われた首都なのか？

298 石をまるで柔らかいパテのようにカットして組み立てられた完璧な造形の巨石遺産の正体

313 ヒッタイト語に酷似した古代ペルーの象形文字は、どのように伝えられたのか？

318 アンデスで太陽が静止した「暗黒の日」——そのときカナンでは太陽は20時間沈まなかった

## 第8章 驚異的な暦・天文の知識は、

天空から飛来する神々<sup>アマナナキ</sup>へのオマージュだったのではないか？！

326 農耕・牧畜には不必要な、正確で長期間の暦と精緻な天文学は、

創造主アマナナキとその母星ニビル観測のために使われたものだった？！

332 すべての天文考古学の源は、ニビル文明を注入されたシュメールにある

340 マチュピチュの夏至と冬至の日の出観測装置——4000年前の仕掛け

350 創造主は楕円形（天体の軌道）で象徴されていた！

第9章  
アヌンナキの宇宙港——クスコ、オリヤンタイタンボ、  
マチユピチュ、ティアワナク、キトー

- 362 謎多きインカ族の文化の起源をシュメール・ヘブライへとつなぐ遺品・遺跡・風習の数々
- 367 イザパの石柱の図柄は、アヌンナキの人類創造・エデンの園を描いている！
- 370 南米インディオの神々は、ギリシャ・エジプト・ヒッタイト・カナン・フェニキア・  
アッシリア——全部シュメール起源——を想起させる
- 376 チャビン・デ・ワンタルの遺跡は、その地下に金採掘のための水路網がはりめぐらされていた！
- 385 チャビン・デ・ワンタルにいたのは、アフリカ黒人、エジプト人——神々アヌンナキの継承者たちだった
- 388 アフリカの巨人族と地中海のひげ族（移住者たち）は、先行する別の移住者、  
インド・ヨーロッパ語族に駆逐されていた!?
- 393 サウイティ遺跡「グレート・モノリス」は超近代的な金型か、鋳型か？
- 396 聖なる谷間コリ・ワイラチナ（金を精製する場所）にある見事な遺跡群の目的は？
- 398 クスコ<sup>中</sup>のサクサワマン遺跡の構造は、大規模な砂金の精選工場に匹敵する！
- 399 オリヤンタイタンボ遺跡は、金の鉱石・金塊を空輸するための施設？
- 405 近東レバノンのパールベク遺跡（アヌンナキ宇宙船の着陸地）との共通点

## 第10章

ティティカカ湖、ティアワナクの遺跡群は、

「新世界のバールベク」アヌンナキの神々の空からの目印の地である！

414 ティティカカ湖——すべての「始まり」の地

416 ここは、アララトのツインピークスとギザのピラミッドと同じように

アヌンナキの神々の空からの目印なのだろうか

418 「巨人たちが一夜で作った」伝説の一枚岩の巨石の人工遺跡は、その製法さえわからない

421 複雑な形状に切り出された石は、技術的に奇跡に近い！

426 アカパーナの地下にまで広がる複雑な水路もまた金塊を洗うための処理施設か!?

434 ティアワナク巨石遺跡「太陽の門」は、シュメールと同じ太陽暦の石のカレンダー

440 ティアワナクの天文学と暦学の観測所カラササヤの遺跡の建築年代は、1万7000年前

449 ティティカカの名は、鉛あるいは錫に由来する——青銅（鉛＋錫）は、巨石をつなぐ「くさび」？

## 第11章

アヌンナキの語源は錫

——歴史から消された南米と近東を結ぶ鉱物資源を介した古代交流

454 聖書の物語に秘められた鉱業と冶金の技術——メタルとは「隠されたものを探し、見つける」こと！

- 461 シュメールを含むメソポタミアのすべての文明は、  
惑星ニビルの技術による金属細工の上に成り立っていた！
- 467 高度な冶金技術を要する青銅（神の金属）で、アヌンナキ錫の産地はどこだったのか？
- 472 錫の鉱石ティエイカカ湖が旧世界へ錫をもたらしていたのか？
- 476 ティアワナクとは、「ティ・アナク」つまり錫の都のことである！
- 482 新旧大陸の錫を介した交流は、
- 488 アヌンナキの神々の手引きにより2000年以上前に行なわれていた  
ペルー、エクアドル、チリ——南米の海岸線が正確に描かれた古代の地図
- 493 ティアワナクと南部アンデスの神は、古代近東の神々を合体させたものとなっている！

## 第12章 黄金の涙を流した神々

- 502 アヌンナキが最初に作った合成労働者「ルル・アメル」と地球の男「アダム」
- 506 エンキの謀いはからいで、大洪水を生きたびた人類
- 507 大洪水後の地球で、人類は、アヌンナキのパートナーに昇格！
- 509 ギルガメシュの名は、「精錬・鑄造の神」を意味している！
- 512 母星ニビルよりアヌとアンツの公式訪問が迫る中で……
- 515 黄金金塊の涙を流す神々

- 520 ペルー、アンデスの鉱物資源——くめども尽きぬディプアニ川の金は、ほぼ純金！
- 523 シュメールの鉱業用象形文字の発見
- アヌンナキは、この地へ冶金・石細工シュメールの職人を連れてやって来ていた！
- 526 ティティカカ湖で葦の舟を操る人々ウル（古き者たち）は、シュメールの子孫たち
- 527 ハイエルダールのコンピラコチャティキ号の冒険が証明したシュメールとの航路
- 528 ペルー語の起源は、シュメール語とアッシリア語
- 530 BC3113年、エジプトで支配権を奪われたトトが
- 中央アメリカ「新王国」に来て主となった!?
- 532 ユダヤ暦の始まりの年BC3760年は、アヌが地球を公式訪問した年！
- 533 ティアワナクに蛇の象徴をもち込んだのもトトとそのアフリカの部下たち
- 536 アンデスの文明は、こうして黄金探掘と共に始まった！
- 538 活動中断の後、ティアワナクは、錫の首都として復活する！
- 542 争いの時を経て、黄金のエルドラドは、「失われた王国」と化していった……

## 古代中米・南米史年表

紀元前 ● 洪積世末 モンゴロイド系人種（インディオ）の一部が、ベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸に移住、各地に拡がっていったとされる。



トゥーラ／主神殿頂部の戦士像

紀元前 10世紀 ● メキシコ湾岸地方にオルメカ文明成立。内陸やマヤ文明に影響を与えた。  
● アンデス地域（ペルー北部）にチャビン文化成立。

紀元 6世紀 ● ユカタン半島にマヤ文明がおこる（～14世紀）。各地に都市と階級が成立し、神殿・ピラミッド・象形文字をもった。都市同盟も結成され、二十進法、精密なマヤ暦も発達した。



太陽のピラミッド／テオティワカン

12世紀 ● メキシコ高原にアステカ文明がおこる（～16世紀）。マヤ文明を継承し、神殿・ピラミッド・神聖文字・太陽暦を有する。首都はテノチティトラン。



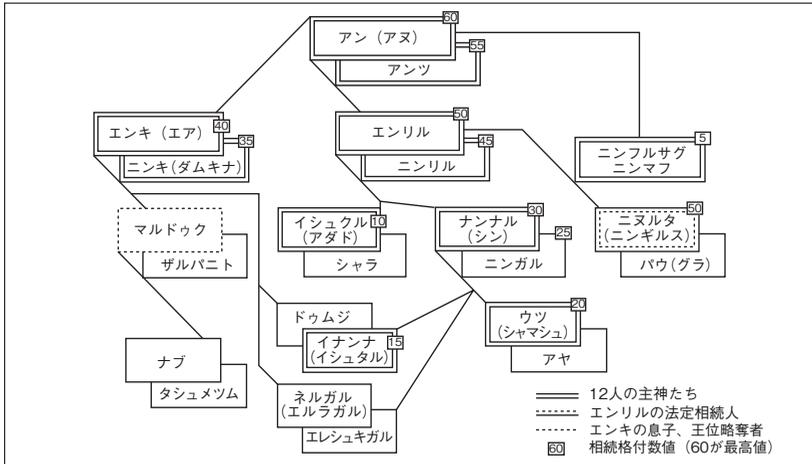
マチュピチュのインカ帝国遺跡

13世紀 ● ペルーにインカ帝国がおこる（～16世紀）。太陽の化身である王（インカ）を頂点とするピラミッド型社会。神殿・宮殿・灌漑施設・道路などを建設。15世紀には大統一国家へと発展。首都はクスコ。



15、16世紀 ● 1492年 コロンブスが西インド諸島のサン＝サルバドル島に到着  
● 1521年 スペイン人コルテスがアステカ文明を滅ぼす  
● 1533年 スペイン人ピサロがインカ帝国を滅ぼす。

## 人類を創成した神々の系図



シュメールの神々の父は天神アン（アヌ）で、その息子に地神エンリルと水神で智の神エンキ（別名エア）がいる。エンリルの子に月神ナンナル（愛称ナンナ）と太陽神ウツがあり、エンキの息子が後のバビロニアの主神マルドゥクである。ナンナルからは金星神で愛の神イナンナが生まれた。これら神々の集団を総称で「ネフィリムまたはアヌンナキ（労働の神々）」と呼ぶ。個々の神々の呼び名は、場所や時代によっても変化し、アッカド人（アッシリア、バビロニア）は、アヌ、シン、シャマシュ、イシュタルなどの呼び名を使っている。

# 中米・南米の地図

